

⑩ 日本国特許庁(JP) ⑪ 特許出願公開  
 ⑫ 公開特許公報(A) 昭62-49838

⑬ Int. Cl.<sup>4</sup> 識別記号 庁内整理番号 ⑭ 公開 昭和62年(1987)3月4日  
 A 61 B 10/00 1 0 3 E-7033-4C

審査請求 未請求 発明の数 1 (全3頁)

⑮ 発明の名称 生検用鉗子

⑯ 特 願 昭61-128277

⑰ 出 願 昭61(1966)6月4日

優先権主張 ⑱ 1985年6月4日 ⑲ フランス(FR) ⑳ 8508386

㉑ 発 明 者 ジヤン-マリー シン フランス国 パリ 75116 アブニユー ビクトル ウゴ  
 トゲン 45  
 ㉒ 発 明 者 ブルン ゼタン フランス国 パリ 75655 リュ デュバンダン 23  
 ㉓ 出 願 人 ジヤン-マリー シン フランス国 パリ 75116 アブニユー ビクトル ウゴ  
 トゲン 45  
 ㉔ 出 願 人 ブルン ゼタン フランス国 パリ 75655 リュ デュバンダン 23  
 ㉕ 代 理 人 弁理士 関根 秀太

要 約

1. 発明の名称  
 生検用鉗子

2. 特許請求の範囲

- (1) シースの一端でリンクロッドに各々連結されたスプーン又はあご部材2個から成り、該リンクロッドはシース内を貫通するワイヤと一体を成すように連結しており、シースの反対端に位置する把手のコントロールをうけ、あご部材の間に針が位置する生検用鉗子において、該コントロール リンクロッド(9,10)が該針(5)に連結し、あご部材(3,4)がその上を針(5)の長手穴(8)が通る固定輪(?)に連結することを特徴とする生検用鉗子。
- (2) 針(5)に横方向切欠部(12)が設けられたことを特徴とする特許請求の範囲第1項に記載の生検用鉗子。

3. 発明の詳細な説明

本発明は、シースの一端でリンクロッドに各々関節状に接合されたスプーン又はあご部材から成る生検用鉗子に係るものであり、該リンクロッドはシース内を貫通するワイヤと一体を成しており、シースの他端に位置する把手によりコントロールされる。

針はスプーン又はあご部材の間に位置する。

公知の生検用鉗子においては、生検標本の採取部位を決めるために用いる針は二組のあご部材の間に固定されており、生検で「組織になる」場所を占めることになる。

更に公知の生検用鉗子はあご部材がお互いに直なるように連結し、各あご部材の切頭端に向向している端部はリンクロッドと接合している。二組のリンクロッドはシースの各端部でメインロッドと接合し、シース内を貫通するコントロールワイヤに固定されている。この種の公知装置は、二つのあご部材と、メインロッドとは一点だけで接合しているリンクロッドとが形成す

## 特開昭62-49838(2)

る並行四辺形が接点を中心にしてのみ傾くことが出来たので生検の精度、効率といった点で欠陥があった。更に、極く小さい部材を組立てるので、細かい手作業を必要とした。

本発明による鉗子は、簡単な構造を有し、鉗子を閉めていても針が引き出し可能であるので、前述した公知の鉗子の欠点を取り除くことができる。あご部材は鉗子を閉閉している際には揺動できない。

上記目的を達成するために、本発明による生検用鉗子は下記の主要な特徴を有する。即ち、リンクロッドは針と連結しており、あご部材は針の長手方向穴が動く固定軸に連結されている。

鉗子を閉じた時に粘膜内への針の進入を容易にするために、本発明は鉗子に横方向の切り欠き部を設けることを配慮した。

本発明の理解の一助とするため、本発明用子の一実施例による切削端を示す添付の図面を参照しながら以下に詳細な説明を述べる。

生検用鉗子は、シース(1)一組、シース1内

を貫通し、切削端部に対峙する(図面の通り)端部に位置するハンドル(図示せず)によるコントロールをうけるワイヤ(2)から成る。シース1内を通過し、ハンドルによりコントロールをうけるワイヤ(2)は、スプーン又はあご部材(3,4)を互いに施回させる。スプーン又はあご部材(3,4)は各々凹み部(3',4')を有する。鉗子を閉じると、これらの凹み部(3',4')により生検の量が決定される、針(5)を用いて生検標本採取の際にあご部材を固定する。

上記の本発明実施例によると、ワイヤ(2)はシース(1)に固定したスリーブ(6)内に位置する針(5)の基部に一体となって固定される。

あご部材(3,4)は、その長さの中央附近でスリーブ(6)と一体であるリベット(7)に嵌合し、その上を針(5)の長手方向穴(5)が移動する。凹み部(3',4')の反対側ではあご部材(3,4)各々リンクロッド(9,10)に嵌合されている。リンクロッド(9,10)は、あご部材(3,4)の反対側で針(5)に固定したリベットから成る共

通軸(11)に嵌合する。

ワイヤ(2)をすべらせると、針(5)と一体軸(11)とを引張ることになる。あご部材(3,4)は開口部(8)が通っている固定軸(7)のまわりを施回する、ワイヤ(2)を索引することにより、あご部材(3,4)から成る鉗子が開り、針(5)は凹み部(3',4')が形成するスペース内に殆ど完全に入ってしまう。この状態では、生検量は最大となる。

2ヶ所(7,11)で案内されるあご部材(3,4)は、公知の生検用鉗子と違ってワイヤ(2)の軸のまわりを回転することはない。

前述の鉗子の組立は、公知の鉗子とくらべて容易であり且つ時間がかからない。更に公知の針つき生検用鉗子と比較すると本発明による鉗子では、針と主要ロッドとが一体化されており、部品の数が一つ少なくなる。このため、組立、固定化、切削作業が容易される。従って、本発明による生検用鉗子は公知の鉗子とくらべて廉価である。

本発明の好ましい実施例によれば、本発明は針に横方向切欠部(12)を設けたことに着眼した。針(5)を引っ込めると、あご部材(3,4)が閉まり、あご部材の切削端部は粘膜内に進入して生検標本を採取、切欠部(12)は針(5)が粘膜外へ出るのを妨げる。これにより鉗子の粘膜内への進入が容易になり特に粘膜の抵抗が強い時には、生検採取を容易にする。

## 4. 図面の簡単な説明

第一図は、本発明による生検用鉗子の一実施例を示す。

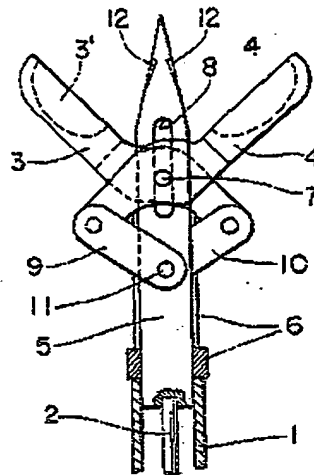
図中 1……シース 2……ワイヤ  
3, 4……スプーン、あご部材  
3', 4'……凹み部

特開昭62-43838(3)

5 ……針                      6 ……スリーブ  
7 ……リベット                8 ……開口部  
9, 10 ……リンクロッド  
11 ……共通軸                12 ……切欠部

図面の浄書(内容に変更なし)

特許出願代理人 弁護士 関根 秀太



手 続 補 正 書 (方式)

昭和61年9月18日

特 許 庁 長 官 殿

1. 事件の表示 昭和61年特許庁第128277号

2. 発明の名称 生体用器具

3. 補正をする者

事件との関係 特許出願人

名 称 ジェンマリー シントゲン(他一名)

4. 代 理 人

住 所 107 東京都港区北青山1丁目2番3号

青山ビル419 電話 408-5281

氏 名 (特許) 弁護士 関根 秀太

5. 補正命令の日付

起算日 昭和61年8月6日

発達日 昭和61年8月24日

6. 補正により増加する発明の数 0

7. 補正の対象

(1) 代産物を示す表面

(2) 適正な図面

8. 補正の内容

刺針の通り

9. 添付書類

(1) 委任状及び同訳文

(2) 図 面

各1冊

1冊



-225-

BEST AVAILABLE COPY

THIS PAGE BLANK (USPTO)